

茶月



始



特 231
137



六月

祭



三 彰 橋 高



詩を生む心(序)

1

新しい詩の創造とは、新しい魂による創造である、趣味や娯樂のためにつくるのではなくて漲り止まぬ心と力、生命とによつて表現されるものである、自然を形態的季題として讀み込む手法に陥つてはならず、自然は自然としての生きた姿を把握しなくてはならない、そして又吾々と離す可らざる生活と云ふことにも、決して盲目ではあり得ないのみかその生活的感情にスタートを持たなくてはならない。

2

クダらぬ約束ごととか規則等と云ふものは吾々の望む『より良き』境地には存在しない、それは妨害にこそなれ吾々の心を生かす何ものでもない『より良く』詩の心を生かし努力し欲求すると云ふ一點に、吾々の要求は懸つて居る、五七五の形態

を規定しなくてもその根本的なリズムは何處までも生かされて行く、生かされ乍ら詩的な燃焼はより強力に自由に、より至上に眞實に、沸騰して行くものでなくてはならない、そのために殊更な十七字型は踏襲しない、そして芭蕉の精神を、現代に生かし度い。

3

私達は正しく生きることを望む、飽くまでも純眞に明朗に、煩はされることなく進み度い。

私は又句境の單純化を欲求する、虚飾のない、偽らない、複雑化した胡亂化しや作爲のない、自然のままに行く流水のそのやうな、淡々たる境地と表現とをもとめる。

4

内在する力である、内から叫びかける言葉であり心である、十七字の鑄形で製造される外部的なものでなく、内からの要求によつて自然と形骸も備へられるものであり度い。

5

何等の黨派も主義もこだわりもない、眞實純一な姿であり度い。

6

澄潤でフレッシュで、ものなべてが青金いろに輝く青葉若葉の頃の清爽快適さは、またひとしほな感觸である『単衣きてこころほがらかにけり夏は必ず我れ死なざらむ』と長塚節も歌つてゐる、自分のうつくつした魂も一切をかなぐり捨てて強く明るく更生する、一年中で好きな青葉とき、『六月祭』の名の生れる所以でもある。

隨筆は各題とも、自分の關係して居る新聞に連載したものである。

昭和九年十一月

唐工しるす

内 容

詩を生む心(序)	一
あをい珠	一
プロフィール	二一
さて、夜となつた	三三
糸瓜の花	四九
白痴の萬作	六一

樹木と私	一四一
花日記	一六三
産業豫備軍	一八五
隨筆	二〇七
早春スナツブ	二〇九
婦線を往く	二二三
晩春初夏	二四一

蟬の聲	七一
煙草とパイプ	八一
明るい朝	八七
芋の皮	一〇一
霧	一〇七
光生の誕生	一二一
養父と母	一三一

小	品	二五一
草	餅	二五三
柿		二五九
手		二六六
跋		二八一

あをい珠十一

太陽の子

密柑つよつよ上は蒼いそら

淋しい人が釣上し腹赤き魚

人間なればしみじみと地球のまるさ

大正八年—大正十一年

太陽の子われらにんげん

そらにひとつのまだまですあをいあをい珠

日輪まどもにをどこ狂へり、あな

日輪まどもにをんな死にたり、あな

結の婚

女こんじきに賣られ行く日の夕べ

唾したれば血ににじみたれ夕べなづむ空

何時までも泣いて居れない俺だった

お前から鼻唄でいい気なもんだ

尻尾を一つあて隠してやがるお前ら

大地に手あつれば熱あり病みてありけり

光らんらん大地剝ぐ手の延べられぬ

闇

子ら木をゆさぶり闇を集めたり

ひそひそと闇の燈に醒めたり原つ場

闇に蠢めける白い生き物なりし

月夜の尿

月夜よろしきみ尿放たるる

尿まかがやかに音澄む月夜

尿影して月夜ふけまさる

虹

虹を取て来んと走り行くか子ら

摩訶不思議子が取て来しよ虹

朝顔

闇を衝いて朝顔の吹くラッパ

朝顔が素晴らしいぞいつばいの晴れ

朝顔咲いたみんなの色どり

伸びたいだけ伸んで朝顔

鉢植の朝顔はいちりん作り

微風あつめて朝顔のいちりん

發^みり見たぞけさの朝顔の花

宮城

天垂らす大城おほきの宮のいや濃みどりな

夕べさみだるるかみか濠に鴨はあをく

草刈る小舟みか濠に雨も明るう

日本橋

富士見ゆるお江戸は日本橋お供の衆

芝山内

柳青う山門の朱ぬり通らるる

嚴島

嚴島の起き抜けを鶯きいたぞ

ステツキ衝いた異人女も交るいつくしま

みやじまで鳩に取巻かれてしもた

丹塗の潮に映ねて大島居日和

紅葉谷

散り積つて紅葉谷眞のツ平

積つた上を水の流れてゐる

千疊閣

鹿らの群れて千疊閣の力餅

草原に寝轉んで子供らと鹿と

尾いて来る鹿を撫でてやる茶色の眼

不消の火

創始時代から曾て一度も缺かさぬと云ふ原始的な遺物、彌山中腹にあり

尻つ尾のも交り肉焙つたか不消の火

森閑と不消の火よ手も觸れがてな

彌山

金出してついで見る彌山の破れ鐘

一つ撞けば二つ撞く彌山の鐘の物古りた

その他

廻れば七浦清盛も浮けた唐人船

濱白ふ水澄んで杉の浦は河鹿なく

見ゆる限りの青葉廻廊に潮満ち

宮島が見え出した宮島詣での船の人等

錦帯橋

花に歩き疲れ、ビールあふつた美味さ、やが
て全身ウデたこの如く、手も足も酔ひ痴れて
前後不覚とはなりぬる淺猿しさ……

錦帯橋の磧に酔ひ痴れて花の假睡

何處から飛んで来たか磧にも花びらの眼醒め

プロファイル
八三六
十二

島村抱月

罪を負ひ道に生きやう抱月先生

妻を捨て子を捨て樂屋の抱月先生

樂屋に訪ふて聞く「不満と叫び」の藝術論

大正八年—大正十二年

「種蒔きた」と何處か淋しい光の黒紋付

松井須磨子

掻き口説けるは須磨子なりふとサロメ・ダンス

血もゆる肉もゆる須磨子よサロメ・ダンス

まことの涙零すてふ舞台の須磨子

大庭柯公

柯公に就職たのんだ記者になる氣の

和田久太郎

尾行をまいた顔で来る久太郎は風呂が好き

明石を生れついて久太の俳句

幾度か死を決した貧しさだと云ふ

岩佐作太郎

イワサ君と呼ばしてよはたちそこの同志

握り飯一つあればよいと云ふ革命男

大杉 榮

筒つぼうの麻着てステッキ握り締め

口調に愛嬌があつた大きく瞳いた眼

(山崎今朝彌)

クツクツと笑ふが癖の今朝彌は放屁
もう肌のたばこでする「杉」の講演會

前田三遊

デヤリーナリストは悔しかろとたより

「デヤリーナリストは真夜中だ」に點頭き

ロダンの話 兆民の話 西園寺の殘黨

融和講演に連れ立つて村長さんらお出迎へ

義眼牙ゆ島の夜の差別撤廢

有島武郎

序文を頼まうとして果てて終つた

後藤謙太郎 (情熱詩人)

關西の酒はうまいと忘れた頃に来る男

女よりも酒はうましと云ふか破れ靴

ほのぼのと何も忘れて酒はうましと云ふ

アナーキストの死はこんなもんぢやないと思ふ——と、氣の觸れる前の遺書、獄中に縊死

アナーキストの屍体のひねびねと横る月か

俺はアナーキストぢやないよ、と云へばうん
うんと諾いて居たりし

草花園の一坪もあらば嬉しかる朝のネクタイ

さて、夜となつた

創造

青、赤、黒

刹那永遠

自分を判らない

大正十二年

刹那は刹那を生み

さて、夜となつた

あれはびいどろだよ

手をあげて押して見給へ

二足獣

二足獣時代の
化石です、これが

口髯はやした
マンキーも居ます

——御覽下さい

草に寝る

草に寝たれば地のめぐる音

足ばかりの女が行く青葉

みんな手を繋げあをい空

雲

世界のみんなも仰いでるかこの雲

綿雲へ乗りにけふも丘行く

雲は語らなはい

丘晴れ

丘晴れ旗でも振らないか

丘晴れ沖を通る二本マスト

鶴嘴そろへておいらの唄

おい等餓鬼のときからの鶴嘴で掌の豆

をみな

薄ものの下のをとめとなつたのか

窓の木ほどの羞ひですこれの女

桃割れのけものめけるを抱きかかへたり

女のうしろ姿の氣になるとしか

髪ふくよかに梳かるる

椿

つばき許こ多た落ち赤いの白いの

月に濡れて

月に濡れていとしい人だった

あてどこのない月だ

月の原つ場を裸で来る奴

何處かでも呼んでる月

ぼんやりと月を見て居た

寝てまてばほがらかな月となり

三ヶ月

月のかげらをほつぽに入れて行く夜だ

あの男だ月を啖つてたのは

月が孕んだんだよ媾曳して居たら

こそと木の葉落ちて月の暗がり

朝

木の青さに朝の生命となり

せいとんした街の木木朝となり

雨上り葉だか蛙だか

すんと伸んだ蒼梧風呂に沈んでる

いろいろな名の彫り付けられて山の石

あんなどこ梅が咲いてる

梅が香にふと氣の變ることか

一つのもの

委せ切つて静かなもんだ

うんうんと聞いてやつてる

神でない佛でないもつと違つたもの

糸瓜の花

糸瓜咲く頃とはなりぬ晴れ續く

家を移る、初秋の頃はひなりし、見違かす屋
根から屋根に生ひ蔓んで風情限りなし、さて
も糸瓜の花ざかりよと遽に心ときめきて……

糸瓜忌は花の盛りを手向かな

大正十四年

黄に揺れて糸瓜は花となりけり

松に咲く糸瓜なりけり遠晴るる

朝たばこしみにらに晴れぬ花糸瓜

風ありと見ねすも糸瓜實となりぬ

風の足觸れにしほどの糸瓜かな

垂れ下りたる一つ一つ、程よき列を作せり

縫はれ行くへちまの數と見たり風

或る婦人像

御佛に似たまひにけり春の風

彼岸入(わが生誕日なり)

牡丹餅や三月十九日生れかな

はかなさ

病院のさくらは咲いて散りにけり

永き日を遊び暮して終ひけり

空へ消えては行くけむり(以下舊作)

軽るさうに煙あがるやけさの秋

呉線

カタコトと驛に着いたり菜種咲く

連翹の中を鐵路の走りけり

見ね隠れ島山かすむ小隧道

江田島の燈台かすむ鴨なむか

灰ヶ峰

灰ヶ峰の紫かすむ日となりぬ

吳港

軍艦は煙もはかす日の遅き

二河瀧

風時折男瀧女瀧の茂りかな

くれなるの衣ほしたり梅の花

紫狐庵

幾山河蒼茫として暮れにけり

幻住庵

隠戸

松涼し清盛塚の潮の渦

玉の浦

千光寺の櫻は船で仰がれぬ

俳諧寺

雪食ひて茨の里の佛さま

子規庵

柿食ひて萬巻の書を讀破しぬ

白痴の萬作

あんまり月を見て居たので

白痴になつた萬作

けろけろと

何が可笑しいか萬作

白痴
大正十五年

何時もしよんぼり

ひとり佇つてる萬作

あんな所で

けふも呼んでる萬作

お前らは

こわい顔した白痴の萬作

何を云つても

平氣な萬作

つんぼでさへある

白痴の萬作

居ないのかと思へば

のつそりと萬作

人の起きる頃を

寝に戻る萬作

いちじつぼんやり

佇つてゐることもある萬作

女房にまで叛かれ

何を考へてる萬作

なにを遣つても

取らない萬作

ぶつぶつと

何か獨り言ちて萬作

うしろを向かない男だ

白痴の萬作

めしも食はないで

二三日夢中になつてる萬作

醫者にも行かないで

水を飲んでる萬作

蟬の聲

葵

こどもしも水涸れる豫報の赤い葵

風もない午後の赤い葵

二階住ひの葵黄も交つて

昭和二年

二
白
い
花

山鳥飛んで何時までも動く白い花

三
麥

首だけ出して麥の中から呼んで居る

四
若
葉

島山若葉だ船に見て過ぎる

ひとむれ強い風となる青葉若葉

船を遣れば青葉に顔を撫でられる

僕は夏が好きだ

白い雲むくむくとけふもお天気

灼りつく陽だぐんぐん堀られて居る

じりじりと蟬の聲も快い黒い身体だ

黒い身体もりもりと汗を弾いて

しつとりと汗かいて青葉風

濱は松續きの男女ら海水浴

海水浴

坊やはだかできやつきやつと逃げ廻るのだ

はだかのおくさんと話してる砂濱

水着ぐつしよりまつはり着いて娘さん潮風

をみなごはそれぞれに恥しい乳房をもつて海水浴

裸体ざくざくと砂濱を踏んで居る

着物脱れば胸の邊りが擦つたい砂濱

娘さんほがらかに日に焦けて居る

泳ぎ

浪のうねりに抱かれて居れば好いのだ

浪に寝てそらのあをさ

煙草とパイプ

たうとうさがしあてたさくらのパイプ
もちきのふもけふも

パイプいろいろにそろつたふくらぬ
つてくれ

昭和三年

またいつぼんふねたパイプのふくろ

こしにさげてもみるパイプのふくろ

パイプとたばここんなにもつてそとで

みやげにパイプたのんだあめのようふる

たばこかふにもくせありまはりみ

ちするあかいつばき

ねいしやさなかのいつぼんをぬきつ

たばこまだある

もうひとくはうつてたばこにしよ

くつしたのはきこちけさのたばこ

しよくごのたばこわにふいてゐる

だれかがかせいでくるたばこせんだといふ

明
る
い
朝

麥

麥は丘なりに穂に出て風をうけてゐる

川に添つて影ながら麥は穂となり

麥畑いくつも越して小高いところ學校

昭和四年

學校歸りの子ら行きづりに禮いっして麥よう伸んだ

丘を巡りて麥穂となる丘の段段

ここら入り海松はしりて麥は丘から丘へ

ここからは下り坂の一本松麥ばたけ見へ

苺

いちごの水を切つて置かれてある白いテーブル

いちごつぶつぶ灯に盛られたりたばこを探る

匂ひはなないちご

葵

葵てんでに瓶に生けてお役所の人ら
 赤い葵のくさぐさが並ぶ一つは高い木
 ふとここの曲り角の赤い葵
 葵ほめられるそとからのお客さん

枇杷

枇杷の實あをあと雨のしづく
 枇杷熟れて水に添ふ高い塀
 雲低う枇杷塀にあふれたり

青葉

バラソル青葉の道を訪はるる

水に足なふらせ青葉にひたつて居る

青葉明るい朝だ女からの手紙が着いて居る

牡丹

大きやかに影をうつして牡丹くづをれぬ

見てあればぼたんくづをれぬ

牡丹ゆさゆさ運ばれる並木道

ぼたんごさと置かれたり

ざくろ

草の中にも落ちてざくろの花

梢にかくざくろは雨を咲いて居る

柘榴の花の一つが落ち居て含嗽の日課

河川の清き水の音は

ここの清水で汗のぬぐはれる

草の根分けて手に掬ふ清水である

雨上りのプラタナス白いズボンが殖れた

西瓜

二つに割れば赤い西瓜なり

ててら吹かれて西瓜くつて居る

西瓜のまるさの音たたか

追悼

故秦野翠嵐氏

ひつぎ今かも疊踏みしめてわれら

寒ン風灯の揺れて葬りの道となりし

葬りての歸るさめいめいのこころ持ち

夜の深さ葬り終りて友の白い足袋

昭和五年

詩集 翠嵐丸

出 射

芋の皮

元日

ピオニーロの話で賑った元日の芋の皮

クビになる年の年が明けて居る

何うせ俺もクビらしいと年賀状

昭和六年

寝ることよにきめておいらの正月

年があけた音の羽子をつく音

その前期

髪が長いからだをんなは

おカツバが殖わてよ元日の女學生

いちりんなるを緋牡丹くれた

鉢ごと買ふて来た葵タバタの水を遣る

アバパート

葵のある窓窓からはズボンも見わ

編輯局 (夏)

ペン先揃へ各がじしのワイシャツ

同 (冬)

元日の記事を書いてゐる風邪の抜け切らぬ

あすは元日の曇掃いて寝ます

霧

霧の中の人生

自動車め霧の中を
行き居つた

深い霧の外
套着てるのだ
つた

深い霧たば
この火を
借りる

霧
昭和七年

霧の流れの音を行く電車

こはいものどてはない霧の中

ステッキ振り振り霧のなか

氣取つてやがる霧のなか

身邊多事

けふも灯り腹の空いた此の道

夕御飯をだけの楽しみの足か

インクのしみ胃やくも飲み忘れ

子ら寝てる顔を見て寝る

子ら育つよ帽子横ツちよ

手の汚れぶきつちよぶきつちよな幾日

窓

おらがそらとなつた

そらはひさいろ靴のひも結ふ

雨あがり窓意はなち

雪

この雪踏み込まうとする

足跡の雪の道續いてる

雪のみち松のみち

乾餅

寒ン雨ぐせのかき餅切り進み

かき餅ならべをはりたるなり

愛國の鐘鳴り響く

千人針の浮かれ女らうそ寒い

萬歳の鯨波の淋しさを聞いたか

愛刀鎮三郎

魂罩めむ生命^{いのち}をかけむ鎮^{ちん}の三郎

古刀

地肌こまかな穂長反り兼光は許すまじい

先き延んだ華表匂ひは正しくな大和

書 賛

唐もろこしの葉のさやさやと夜空への道

煙草と上海

柿本虹嶺、上海事變で從軍記者となり功績顯

著・三月芽出度く凱旋す、煙草好きの二人と

て話は盡きず殊に名のある若禿げのいよいよ

眼にしるきに……

たばこの都であたま禿がしたか

煙草のけむり彈のけむりシャンハイ

煙草と握り飯つめ込んで戦争はオモロイぞ

弾くぐつて歸つてはたばこと酒と

くさぐさたばこを見せる手ヅマのてつき

ピンク色のたばこの罐なんと書いてあるぞい

おまへの土産だどたばこのだいじな

指と眼とニコチンの黄色く笑へば愛嬌齒

光生の誕生

出生

昭和七年十一月十四日午前七時ごろなりし

踊り出た赤ちゃんばかりがついて居る

三十五の子で俺も三十五の子

出生の昭和二年

子なんど抱く氣の三十五

大臣がまた一人殖わたぞ二千五百九十二年

妻に

お前にも似てる俺にも子ろと云ふもの

一家五人となる

光生二つに候われらの雑煮餅に候

ないことにシネラリヤ等買つて光生の正月

二ヶ月となる

もう灯を求めて居るつぶらな瞳

腫すはる

なんと親爺の顔の不思議な幼い腫

鼻を食つ付けてやると厭がる癖

元氣な聲で肥ります寒入りも何も

風呂を使はすが楽しみもどうらぬ手の

小さい乍らに足袋履いてよう泣きます

大ぎんたまだなこいつ湯に浸つて

いい湯に浸つてふとる子を見て居る

悪い奴め抱き上げるともう笑つてる

泣くこと一日疝聲はまさしく

すやすや寝てる寝床に戻る

意地悪い顔で寝てる足音たてまい

抱かぬ日は服のまんま寝顔に贖り

何時までも這へない子

這へないことだ此の子強いのか弱いのか

這へないままに歩き出した山茶花が白い

母あちやんの名は云へて歩んよが上手

可愛い頬つべた食つてやる坊やのち小いちやい足あんよ

抱き上げて頭を叩かして居る

養父と母

養父古稀

子らに繞かれて食ひ足りた古稀か

珍らなこと子らの訊く訊く古稀の夜

蜜柑食ふて古稀の夜の親子は下戸

養父 昭和八年

古稀とは顔ばせの黒い髪

念佛精進たらちねの子らは働き

雪の降るはなすかみ及くは古稀は

養父古稀

雪

起きて見たれば雪が積つて居た

雪の降るのコン俯瞰されたり

すつしりと雪を被つた石である

雪解の街もう獅子舞が来た

獅子舞の笛のはればれと雪解けた

笛の音はればれと死ぬことを思つた

娘十八だいいこんの花が白い

赤い實

雪の朝あかい萬雨が置かれてある

一と車は葉のあかい實の赤い南天

母病む

星凍る夜の道母は癒るだらうか

母重し歸り着いて弟らよ涙が溢れ

頬のげつそりたらちねは絶ね入る咳

妹に

死ぬことは覺悟の母が一と眼見度い子

子が四人揃つて母よ死に給ふ勿れ

生命取り止めた母の濕布を代へる

出来て來た梅の軸參らするも母の病床

別れ住めば母の病の妻に云ひ聞かする

弟の春を楽しめりし

京参詣りの春のプログラムを病み給ふ

假初の病ひ重態ゝるてふ人の世か

樹木と私

夏の花

一本の鳳仙花さかでもの白い花
どんよりとあかいカンナ腹痛を耐へ

中通

夜の人ごみ鐵砲百合の匂ひはじめ

樹木 昭和八年

夜見世 (三句)

葉ばかりと花のとペゴニア許り一と所

齒が生ねはじめて光生には廻り燈籠

グラデイオラス夜會服を着る

悼従兄肇

死ぬことの人間の世を美女ざくら

死生長夜夢

來ん世はわが身も菖蒲かきつばた

樹木と私

久し振りの雨を眺めて居る樹木と私

木木の葉っぱが雨に跳つて居る

しつとりと雨を吸ひ込んだ木木である

梅雨ばれ

梅雨ばれ街には梅賣りの人ばかり

買はるる青梅取り巻いて女ども

青梅のほろ苦さを食つて居る

梅雨ばれのセーラーズ銃の秀を揃へ

ブラタナス夾竹桃は花もちちて

螢

螢
ゆ
ら
ゆ
ら
水
の
音

河の中のタバコの火螢はまだか

のつそりと闇に出會つた螢を探り

ほうほう螢タバコの火を貸せ

螢籠の母娘赤い帯は娘である

キャンブ

夏曉木わたりに父と子のしむらゆばり

夕ゆとる街には將碁盤をアイスケーキ屋

所の中の

柿

柿の實のつやつやと豊らかなよひ

柿の實のほればれと電燈あかるい

抱いて寝まいか歌書こか柿の實

つくづくと柿の實の冷めたさに觸れ

籠り居書齋に柿は食ふべかり

ふどいの小さいのとりどりに柿は食ふべかり

むしやむしや柿を食つて居た

人知れずこそ色づいて葉がくり柿は

望郷

木練柿は殿の高さを攀ちて朝毎

雁來紅

位置變り居るバルコンにしてかまつかは仰がれ

かまつかかつかスボーツ日和

かまつかかつか思ひ出る人のある

生

生きることの世の中を文句があるか

お前らになにが判るか

ダリヤ深か深かと咲き居たれ裏畑

死

煙でしかなかつた生命だと思ふだらう

木屑と一緒にキレイな灰だ今朝の屍

何が哀しかろお前らも死ぬことの人間

青い石

田口定男氏より硯を呉れる

空のあを水のあをを塊の硯か

青い石のなりの自かまるさよこれの硯

後 姿

人のうしろ姿を見る

お前はお前の頭を蹴つて居たのだ

味 爽やかな車が通つた

透明な輪轉機

透明な輪轉機の唸りさあ新聞紙の方程式

明日の世界を削つて輪轉の恣欲な唸り

ダイナミックな唸りの底に飯食ふ人間

自嘲

—宴に侍りて

酒のまざれば蜜柑食ひて更けまさる

蜜柑食ひて鼻先き赤う逝く年か

皇太子降誕

—八年十二月二十三日

初皇子のおみかん日和

そらは日の丸初皇子の御食國

空

けさの蒼さを飛行機とばして

飛んでも飛んでも淋しかろ空は飛行機

墜ちるのかと思つたら飛行機

花
日
記

元日

元日 おみかん日記の付け始め

蜜柑とつさり正月となつて居る

蜜柑と餅と正月は晴れ

昭和九年

元 日 の そ ら と な り

元 日 の 炬 燵 お り み か ん

元 日 お 蜜 柑 の 霰 も 霽 れ た ら し

正 月 は 爪 先 の 蜜 柑 の 匂 ひ

蜜 柑 ひ ぎ ひ ぎ 小 説 の 題 を 考 へ る

ラヂオ聞いていた蜜柑剥いてた

晴 衣 お り み か ん

蜜柑は酸っぱいもの

蜜柑食つて男は育つのです

二河峽

青葉は青葉を生んで巖を絞る水

柳

柳花さく靴のエンメル

柳花さく散髪の頭

柳花さく風車賣り

柳花さくからかさ干され

柳花さく雨上りの四ツ辻

柳花さく新築の家

柳花さくおくさんは嘘つき

柳花さく坊やはあんなよ

柳花さく汽車は鐵橋を渡る音

雨上りもうデントアの柳さく

梅の匂ひだ闇を來る
 梅を活けて明るい障子
 梅咲く白い雪が降る
 梅ちらほら雪ちらほら

梅

うめさく歪つな地藏さん
 うめのそら
 梅の月夜ふんすい

小高い所あがつて梅咲く

浮堂を廻つて梅への道

新道赤肌うめの咲く

散る影を池に梅の花

松の葉に散りかかつて梅の花

生涯酒杯を持たず

酒宴を断つて戻る道のヒヤシンス

桃

白いの赤いの桃の蕾を買はぬか

桃の蕾ふつくらと手に觸れていとし

桃の花しろじろと闇に此の家のある

渺茫として雨煙る桃の花煙る

桃の花白ふよべの寝たらぬ

桃の花もつ手の白さ

毛むくぢやらかな親爺ももつて桃の花

桃の花は白さにこもりくの匂ひ

桃の花ほのぼの男三十七で

桃林居士

桃咲く朝からの牛すはつて居る

牛の乳絞るなりはひ桃の花咲く

櫻

櫻にかたまつて立ン坊は出番を

立ン坊さくらにアブレてる

女も居てトロを押すさくら散り初めた

櫻にひねくれて佗しい勤めを佗しくして居る

公園地帯の四月馬鹿がさくら散らしよる

さくら音頭の輕薄な音色だ勤めを歸る

いい若い者奴へナチヨコダンスでさくら

一人で來るさくら

刑務所のだらだら坂さくらが咲き出した

櫻に働いて居る子らある女房ある

夜ざくら脱がれてある女草履

アバートの窓櫻さいてけふは休み

花に遠退いて記事のあけくれ

うららかな女房何處へやら行くと云ふ

一人の来るる

舞で下落つて花は夾着の赤い

緋のいゝ鯉と黒のいゝ鯉と棲む落花

落花をうけてて殿ついで銅像

袂に肌も交つて落花

理想

食はんが爲に働いて来た外に何がある

女の顔より儂い理想のイメージだ工場のサイレン

黙つて働いて来た夾竹桃の赤い花

産業豫備軍

牡丹

ぼたん届けらる——三句

届けられし牡丹のいかさをひらいた

牡丹のいかさ書齊にあまり

昭和九年